

令和5年度

学校推薦型選抜試験問題

地域創生学部 地域創生学科
地域文化コース
小論文

注意事項

- 1 試験開始の合図があるまで、この冊子を開いてはいけません。
- 2 問題冊子（13 ページ）には、解答用紙（2枚）及び下書き用紙（2枚）が挟み込んであります。試験開始の合図があったら、直ちに中を確かめ、印刷や枚数の不備などがあった場合、監督者に申し出なさい。
- 3 問題冊子の間に挟み込んである解答用紙を取り出して、すべての解答用紙の所定欄に受験番号を記入しなさい。
- 4 解答は、すべて解答用紙の所定欄（横書き）に記入しなさい。
- 5 句読点は、一字と数えなさい。
- 6 試験室で配付された問題冊子及び下書き用紙は、退出時に持ち帰りなさい。

このページは白紙です。

このページは白紙です。

[問題1] 次の文章の下線部分「なぜ、自然の恵みである農や生命の糧である食が、これほど地球も人も不健康にしてしまう状態になったのでしょうか？」について、筆者の主張を要約し、その意見に対するあなたの考えを600字以内で述べなさい。

なぜ、自然の恵みである農や生命の糧である食が、これほど地球も人も不健康にしてしまう状態になったのでしょうか？ それは、食べものが「商品」となり、資本主義経済の仕組みに組み込まれてしまったことに原因がありそうです。

お金がないと食べられないって、当たり前でしょうか。今日のご飯どうすると聞かれたら、コンビニで買うとか、学食で食べようとか、考える人が多いと思います。ときには家で料理をしたり、家族が作ってくれたご飯を食べたり。でもその食材はスーパーや生協などで購入する。最近はテイクアウトしたりネット注文したりするかも。つまり、現在では「買い食い」が当たり前になっているといえるでしょう。

でも、人類の歴史を振り返ると、これは比較的新しい現象です。毎日の食を確保することは、狩猟採集の古代から現在まで生きるために必須な行為です。ただ、食べるために働くことの意味が変わりました。

かつて世界のほとんどの地域で大多数の人たちは、自然に近い農村に住み、自分たちの食べるモノ、着るモノ、使う道具などを、基本的には自分たちで作って、食べたり着たり使ったりしていました。労働とは、自分や家族が使用するモノを自分たちで作ること。田畠を耕し、種をまいて作物を育て、家畜の世話をし、その収穫物を料理して食べ、その残骸やふん尿を土に戻して地力を保つ。そのための資源は、自分の田畠か借りた土地か、村が共同で使う野山や川や海など周りの自然環境でした。

このような、生活のためにみんなで管理して利用するみんなの資源を日本では入会地と呼んだり、英語では「コモンズ (commons)」と呼んだりします。

自然環境とは共有財産で、そこで生活し、その資源で自分たちが生きていくために必要なもの。だからこそ、この生活の基盤を護るためにいろんなルールが決められました。みんなの財産といっても、だれもが好き勝手に使えたわけではありません。自然を利用させてもらいながらも子孫の代まで維持できるよう、土の力を回復するために堆肥を入れたり、木を植え山の手入れをしたり、魚を捕る時期や量を制限したりして、環境を持続させていたのです。

ところが200～300年ほど前から、多くの人たちが農村を離れ、都市部の工場や商店で働き始めました。自分の土地も村の共有財産も失い、自力では食べるモノ・使うモノを作れない。だから、他者（=資本家）の土地や工場で、決められた時間、決められた仕事を

して（＝賃労働），その稼いだお金で食品や必要なモノを買う。つまり賃金を得るために労働して、そのお金で、食べたり、着たり、使ったりするモノを買うようになりました。

現在では当たり前かもしれません、賃労働という、他の人に雇われて、生活とは切り離された工場や会社に行って働いて、その代わりに賃金を受け取るという労働の形は、資本主義社会に入り産業革命のころに始まった新しい働き方でした。

すると、この労働者たちが必要とするモノを代わりに供給する産業が形成されます。モノを買う「消費者」が集まつた「市場」^{しじょう}向けに、売って儲けるために「商品」を製造する産業、その商品を流通したり小売りしたりする産業などが作られていったというわけです。食べるモノも、自分で栽培する・育てるモノから、企業など他の人たちが製造した「食べられる商品＝食品」へと変わりました。

ここでポイントは、「商品」とは、市場で他の人に売って利潤を得るために生産するモノであって、自分で使うために作るモノではないということ。そして、自分で使うために作るモノと、売って利潤を得るために作るモノとでは、違ってくるということです。自分で使うためにモノを作るときには、空腹を満たして元気になるとか、寒さを防ぐとか、長く使えるとか、役に立つことが重要でしょう（経済学では「使用価値」といいます）。そのモノを作るための資源や知恵やスキルを自分が持ち続けることも大切です。

対して「商品」としてモノを作るときには、売って利潤を得ることが第一目的です。儲けるために作っているのですから、いくらで売っていくら儲けられるかが重要になります（経済学では「交換価値」といいます）。（中略）

結果として現在では、大多数の人たちが買い食いする「商品」を供給するために、農業は、自分たちが食べるモノを育てるというより、売るための「商品作物」を生産する産業へと変わってきました。そして、この農産物を原料として使う製造業、さらには流通・小売業、外食産業、商社や金融業など、農と食に関わるさまざまな産業が発展してきました。現在ではもっとたくさんの産業が絡み合って、私たちに日々の食を提供しています。

このような、さまざまな企業と産業が構成する食料供給体制は「資本主義的食料システム（capitalist food system）」といわれています。そして、このシステムを構成する企業たちはそれぞれ利潤を求めてしのぎを削り、産業や政府は成長を目指す、資本主義経済のカラクリで動いているのです。

この経済のカラクリの中では、人などの幸せや自然環境は、お金で計る企業の損得勘定には含まれず、むしろ何かの対策をとるために費用（コスト）になる、マイナス要素になってしましました。国のGDPには、人と自然を破壊することでもお金が動けば経済成長としてプラスに計上されるほどです。『肥満の惑星（Planet Obesity）』という本は、経済

成長を GDP で計っていると、人や地球が不健康になればなるほど「経済成長」することになると指摘しています。食品を過剰に生産して必要以上に消費（食べ過ぎ）すれば経済成長、メタボになってジムや医者に行けば経済成長、トクホやダイエット食品を買い食いすれば経済成長、食品ロスを増やせばその処理事業でも経済成長というぐあいに。

逆に、自分が家庭菜園で有機栽培した野菜を、自分で料理して、おいしく健康な食生活をすることは、人と自然がハッピーにはなれても、GDP には計上されず経済成長につながらないのです。

それが、生まれる前から私たちがその中で生きている、資本主義経済のシステムです。

食べものの話から、いきなり経済や資本主義の話になってちょっとビックリかもです。食べものって、個人の好みや文化だし、もっと柔らかい話だと思っていたのに、経済や政治に関係あるなんて、と。でも、お金がないと食べられないように、私たちが日々食べているモノは、この経済と政治の仕組みの中で、いろんな企業や産業が絡み合って、作られ加工され私たちの口まで届けられます。私たちが食べるモノに関わるいろんなルールや貿易協定を決めているのは政府です。そして、そのすべてが基づいている、いわば今の世界のオペレーティング・システムが「資本主義」なのです。

資本主義とは何ぞや、という議論は奥が深すぎて泥沼化するので、ここではごく簡単に紹介しましょう。

辞書では難しい言葉を使いながらこう説明しています。「資本主義 (capitalism)」とは「封建制下に現れ、産業革命によって確立した生産様式。商品生産が支配的な生産形態となっており、生産手段を所有する資本家階級が、自己の労働力以外に売るものをもたない労働者階級から労働力を商品として買い、それを使用して生産した剩余価値を利潤として手に入る経済体制」(広辞苑第七版) と。読んでもわからないと思うので、ざっくりと解説しますね。

先に働き方が変わった話で言及したように、資本主義経済とは、お金や土地、工場、機械など、モノを作るために必要な「生産手段」を持っている (=所有／私有している) 「資本家」が、これらを持たない「労働者」をお金で雇って、「市場」で売って儲けるための「商品」を生産する経済システムです。

生産手段を持たない人々は、自分の身体と時間しか持っていないため、自分の労働力を「商品」として資本家に売って、代わりに賃金を得る賃労働者となりました。

資本主義のポイントのひとつに、財産の私有があります。儲けが自分のものにならなければ、だれもがんばってお金や労力をつぎ込んで「商品」を生産しようとしないですね。もしくはみんなが共有地から必要なモノを得たり作ったりできたら「商

品」は売れなくなります。「商品」は、売らなければ儲けられないのですから。

そしてこの経済システムでは、商品を生産するための土地や工場や機械などを私有している「持てる人（＝有産階級、資本家や地主）」と、これらを生産するための手段を持たず、それどころか生活の基盤も不安定な「持たざる人（＝無産階級、プロレタリア）」とに分かれたといわれています（最近は状況が少し変わってきましたが、基本的には、ということ）。ちなみに、この私有や財産に関するルールを決めて保障しているのは政府や法律です。

もうひとつのポイントは、利潤や儲け、成長や拡大を無限に求め続けるシステムだということ。（中略）儲け続けなくてはならない、それが資本主義なのです。

資本主義の「資本」とは、単なるお金ではなく、より多くの利潤を求める利潤といわれています。常に利潤を求めてモノやサービスを生産し、競争し、さらに拡大していく。つまり、「資本とは、金儲けの運動であり、金儲けを延々と続けるのが『資本主義』なのです」（斎藤幸平 NHK テレビテキスト）。地球が壊れそうになんでも「やめられない、止まらない」、いや、このシステムでは止まれないです。

拡大と成長を続ける経済システムですが、そのシステムが動いている地球は有限です。資源には限りがあります。私たちが必要とするモノもすでに飽和状態といえるでしょう。もうフロンティアがないのです。そのこともあって、近年では資本主義が行き詰まっていることが議論されています。

もちろんまだ必要な食もモノも充分に得られない人も多くいます。でも「捨てる！」技術が流行ったりミニマリストが称賛されたりするほど、多くの人々はモノを持ちすぎている。そんな消費者にもっと売ろうとして、マストバイとか、今季買うべきとか、買わないきやソン！とか、広告や雑誌があおり立てる。つまり、消費者が必要なモノだけを作って売って儲けられる時代は終わったといえるでしょう。

食べものの世界でも、生きる糧を得るのとは違う要素でもっと食品を売ろうとしています。次々に発売されるスイーツや新商品や、次々に打ち出される名産品やご当地グルメ、人気アニメのレストランやキャラ商品はほんの一例です。そもそも塩や砂糖や油も、人間の本能が求める以上に食べさせようと、企業が消費者にもっと食品を買わせるために利用しているとの報告もあります。売るために注ぎ込まれる創意工夫はすごいですが、人の健康と自然環境に対しての影響はと考えると疑問に思います。

それでも「商品」を売り続けないと成長できない。だから、グリーンとかヘルシーとか、意味づけや成分や形を変えて、とにかく売り続ける。それが資本主義のロジックだから。そして企業は他社よりも売って儲けなくてはならない。たとえ市場が成熟してもモノがあふっていても、みんながむしゃらに競争し続けなくてはならない。それが資本主義の

世界だから。

かつては農村や植民地をフロンティアとして、そこで自然や地域社会が長い年月をかけて蓄積してきた富を横取りして、それを資本として産業を発展させ経済成長した時代もありました。「商品」を売るためのフロンティアも、都市から農村へ、国内から海外へ、先進国から途上国へ、BOP（ピラミッドの底）と呼ばれる貧しい人たちへと市場を広げてきましたが、それもそろそろ飽和状態です。

とくに1980年代からは、市場に任せてさらに経済成長しようとする新自由主義やグローバリゼーションに併せて、金融資産が実体経済を超えて膨張してきていることも問題です。つまり、労働者が汗水流して作り出した実際の経済サイズより、ずっと大きなサイズのお金的な資産が膨れ上がって、さらに新しく儲けるための分野が求められています。そこで新たなフロンティアとして、必要以上に人を動かす過剰な観光業の推進や、水道など公共事業の「民営化」や、いろんなデータの商品化や、「経済の金融化」とさらなるマネーマネーなどなど、さまざまな分野で儲けられる市場の開拓が試みられているといえるでしょう。

この資本主義がどのようなシステムで、何を目指して、どんなロジックで、私たちが生きる社会を動かしているのか。私たちの生活すべても未来も決めてしまう重要な仕組みなのに、資本主義の国に住む多くの人々は、資本主義についてほとんど学びも考えもしてこなかったというのが現状です。

でも、資本主義が好きな人も嫌いな人も、私たちは今現在このシステムの中で生きている。しかも、このオペレーティング・システムが、行き詰まっているらしい。すべてが基づいているOSにたとえられても、変えられない絶対的な存在ではない。気候危機とパンデミックなどで社会の問題が表面化した今こそ、この危機を私たちへの警告メッセージと受け止め、みんなでシステムチェンジに取り組むべきだと、ナオミ・クライン（『地球が燃えている』著者）などが声を上げています。

（平賀緑『食べものから学ぶ世界史 人も自然も壊さない経済とは？』岩波書店、2021年、一部改変）

[問題2] 物語は時代や思想、立場によって読み替えられるものである。聖徳太子の伝記を描いた「聖徳太子伝」（聖徳太子を太子と略し「太子伝」ともいう）も同様であり、時代や立場に応じて、新たな物語を加えるなどの編集が施され、現在さまざまな内容のテキストが伝わっている。それを踏まえて、次の文章に述べられる、「聖徳太子伝暦」と「中世太子伝」との相違点をまとめ、「中世太子伝」の一つのテキストである叡山文庫本系『聖徳太子伝』における聖徳太子の蝦夷えびす^(注1)に対する行動を、あなたはどのように考えるか、600字以内で説明しなさい。なお、聖徳太子は太子と、『聖徳太子伝暦』、叡山文庫本系『聖徳太子伝』の名称は、それぞれ伝暦、叡山本と略してよい。

私たちが聖徳太子という人物から抱くイメージとはどのようなものでしょうか。若い人なら、隋の煬帝相手に対等外交をやってのけた大政治家といったところが代表的なイメージでしょう。年配の方なら、一度に十人の話を聞き分けた天才といったところでしょうか。しかし、日本古代末期以降、聖徳太子は「我朝の釈尊、日域の新仏」（文保ぶんぽう^(注2)本系『聖徳太子伝』）という言葉が端的に示しているように、日本で生まれた新しい仏様、言い換えば、日本仏教の祖であったのです。なおかつ、推古天皇の皇太子だったですから、仏教と王権（中世の言葉で言えば仏法と王法、現代風に言うと宗教と政治）の両権を握る絶対的な聖人しょうにんとして君臨していたのです。

たとえば、平安時代に編纂された『日本往生極楽記』『今昔物語集』『法華験記』といった仏教説話集においても、聖徳太子は冒頭を飾っていますし、中世末期、広範な信者を得て勢力を拡大した浄土真宗（本願寺教団）においても、親鸞しんらんと並んで尊崇されたのが聖徳太子でした。ここでとりあげた『太子伝』を含む「中世太子伝」と通常呼ばれるテキスト群も、こうした幅広い聖徳太子信仰が生み出したものと言っても過言ではありません。

「中世太子伝」の根拠になった書物は、『日本往生極楽記』等も参照した『聖徳太子伝暦』です。これは成立（一応十世紀ではないかといわれています）も編者も不明な、現代人の眼で一見しても偽（＝擬）書というかトンデモ本らしいいかがわしさが漂っていますが、平安中期には、聖徳太子の正統的な伝記として聖典となりました。そして、鎌倉末期以降、このテキストの内容をも大幅に逸脱するような独自な太子伝が多く作られていったのです。これが現在、研究者の世界で「中世太子伝」と呼ばれるものです。代表的なものとして文保本と呼ばれるものがありますが、ここで取り上げたのは、叡山文庫本系と呼ばれるものであり、両者は大きく内容を異にしています。その違いに注意しながら、これから、十歳条(注3)の内容に入っていきましょう。

『聖徳太子伝暦』によれば、太子が十歳のとき、蝦夷が日本を侵すという事件が発生しました。あわてふためいた朝廷がどうすべきか判断を下しかねていた時、意見を求められた太子は、武力による鎮圧ではなく、徳によって説得すべきだと天皇に進言します。十歳

の子供がこんなことを言うとは信じられませんが、太子は超人とされていますから、これには今は疑問を感じないで先に進みます。

太子の進言は、天皇の容れるところとなり、蝦夷の大将が都に呼び寄せられ、以後、末代に至るまで日本に忠誠を誓うことで事件はめでたく収拾されます。

ところが、「中世太子伝」になると、記事が大幅に増補され、原型とは似ても似つかないものに変貌しています。どのテキストも、蝦夷は国境どころか、都近くまで攻め上ってきて、国家的的一大事となっています。テキストによつては、天皇が都落ちする事態にまで至っているのです。かかる国家の危機を十歳の太子が解決する方が、太子の存在はさらに大きくなりますから、そのような意図が中世太子伝製作者にあったということでしょう。

次に、日本を侵略する蝦夷がどのように描かれているか見ておきましょう。中世太子伝を代表する文保本では、蝦夷は「鬼神」^(注4)と同じとされています。だから太子も、叡山文庫系でも記されている、大石を自在に動かす神変^(注5)を起こして、なかば暴力的に蝦夷を屈服させています。

しかし、叡山文庫本系では、大石を動かす神変はありながらも、他と全く異なる蝦夷像が提示されており、そこが注目されるのです。(中略)

叡山文庫本系によれば、太子は、蝦夷のことを「心正直」な人たちと捉えています。これは、中世における蝦夷認識では画期的なものと断言できます。太子伝に限らず、蝦夷は、「背の高さ十六丈、目鼻十六、口十六、頭は八つ」(『御曹子島渡』)と怪物のように描かれるのが通常でした。だから文保本太子伝のように、人間ではない鬼神として蝦夷を描くほうがむしろ通常なのです。前近代社会では、辺境と呼ばれる地域に住む人々は、中国なら南蛮・東夷・西戎・北狄、インドでもスリランカには鬼が住み人を食うとされているように(『今昔物語集』卷五第一、第二話)、我々とは異なる人間ならざる存在であるとおおむね思われていました。(中略) いずれも事実に反し、今日の視点で言えば、差別そのものの叙述であり、認識ではありますが、こうした叙述=認識は、前近代なら世界中どこにでも見られ、ある種の共通性をもっていたことも知っておいたほうがよいでしょう。

こうしてみると、蝦夷をまったく差別せず、しかも、自分たちよりも心正直な同じ人間だと捉えている叡山文庫本系太子伝が画期的な書物であるという理由がお分かりになるでしょう。

それでは、叡山文庫本系はどうしてこのような蝦夷像をもったのでしょうか。それは、天台本覚論^(注6)という天台宗の教理に基づいていたからだと思われます。天台本覚論は、「煩惱即菩提」^(注7)という言葉が著名ですが、とにかく、あらゆるものはすべて平等だという価値観に立ちます。なにしろ、煩惱(=悩み)は菩提(=悟り)と同じだというように、対立する二者の間に一切差異を認めない立場ですから、そこから日本人も蝦夷も同じであるという考えは容易に出てきます。

(中略) 太子は、蝦夷たちに対して、馬上から「畏れ」^(注8)と命じるという偉そうな態度を

とっています。ここで、なんだ、他のテキストと同じで太子は蝦夷を馬鹿にしているのではないか、と思う人がいるかもしれません。しかし、その直後に、蝦夷がこの態度に対して無礼ではないかと猛烈な抗議をしていることを見るならば、蝦夷の方は、太子と同じ人間だと思っていること、さらに、蝦夷と日本を対等な国と思っていることが判明するでしょう。蝦夷の主張はまっとうなのです。

この抗議に対して太子がとったのは、蝦夷が侵寇(注6)して来た理由ならびに蝦夷の大将らの名前（＝名字）をすでに知っているということを示すことでした。蝦夷は太子のことは何も知らないのに、太子は知っている。これは普通の人間ではないということになり、蝦夷たちは畏ります。

それに加えて、太子は、蝦夷に対して、蝦夷語で話しかけるのです。「ひんそりひんそり すちやう けいやさん」がそれであり、これが正しい蝦夷語であるとは思いませんが（中略）、とにかく、蝦夷語を使って蝦夷に話しかけるというのは、蝦夷に対して対等に接する意図があるということ、および蝦夷を圧倒する超能力の持ち主であるということを認識させるのに十分でしょう。ちなみに、古典テキストで、蝦夷語が、たとえまちがっているにしても、そのまま出てくることはこれ以外にはありません。ここには、日本語も蝦夷語も同じ言葉であるという天台本覚論に基づく平等感があったことは間違いないと思います。

しかし、その後、記される大石を自由自在に操る太子は、（中略）あまり感心できません。文保本と同様に、力ずくで蝦夷を屈服させていると見なされるからです。本文では、太子は、「彼等に神変を見せずは降伏なし難し」と判断しています。蝦夷の名字を知り、蝦夷語を話しながらも、それだけでは蝦夷は屈服しないという判断には、やはり蝦夷蔑視があるような気がします。そこを限界とみる考え方も分かりますが、ここには載せませんでしたが、この神変で蝦夷が震え上がった後、太子は態度を一変させて、蝦夷に望郷の念を切々と訴え、泣き落とし戦術で蝦夷を完全に降伏させています。また、本文でも、「太子は害せん為にはあらず。彼等を降伏(注7)せんとの御方便(注8)なり也」とあるのは見逃せません。太子の大石を自在に扱う神変も、蝦夷を降伏させるための方便、つまり、手段として捉えています。太子の今で言う生命尊重主義を言っているものとも思えますが、根柢には、蝦夷を対等な人間と見ているからでしょう。

最後に、それでは、太子の態度は、現代でいう、人間の平等を価値観の前提に置く民主主義そのものなのでしょうか。中世に突如現れた民主主義と考えてよいのでしょうか。残念というわけではありませんが、叡山文庫本系の太子伝に現れた思想は民主主義ではありません。共に「人間の平等」を第一原理としていますが、太子伝を支える天台本覚論には、民主主義とは決定的に異なる思想が入っています。それは、現状肯定の思想です。変革など考えていません。よりよい世の中といった進歩史観などない、ということです。具体的には、日本人は日本に住み、蝦夷人は蝦夷に住むということが大前提になっています。

す。一緒に暮らそうなどとは考えていません。だからこそ、太子は、蝦夷を蝦夷に帰すように一所懸命働きかけているのです。名字を既に知っていたり、蝦夷語を話したりする超能力、大石を自在に操る神変、そして泣き落としも、すべては蝦夷を退却させるための手段でした。

この現状肯定という思想は、現実に存在するさまざまな社会的差別などもそのまま肯定しますから、平等観念とある種の差別観念が同居しているのです。してみると、太子は、結局は蝦夷を差別しているということになるでしょう。しかし、頭から蝦夷を鬼神として打倒の対象とする文保本系と比べて、叡山文庫本系の太子は、蝦夷を同じ人間として見ていて、これは十分に評価してもよいのではないかでしょうか。（中略）

古典は古典の論理で読み解くしかない。しかし、そこには彼らの思考の達成があり、それは現代と照らし合わせても決して遜色のないものだったと知ることは無駄ではありません。

（岡崎真紀子ほか『高校生からの古典読本』平凡社、2012年、一部改変）

（注1）蝦夷

えびす。外国、未開の地。またそこに住む人。

（注2）文保

鎌倉時代の元号、1317～1319年。

（注3）十歳条

聖徳太子が十歳の時の叙述。

（注4）鬼神

超人間的な威力や能力をもったもの。ここでは羅刹（人をたぶらかし血を吸うという鬼）などのような悪鬼神を意味する。

（注5）神変

人間の知恵でははかり知ることのできない不思議な力。

（注6）侵寇

敵地に侵入して、害を与えること。

（注7）降伏

神仏の力によって、悪魔、煩惱、怨敵などをとりしづめること。

(注 8)

方便=人々を真の教えに導くための便宜的な手段。